

ラムサール条約
登録湿地



志津川湾



南三陸町

もくじ
目次

1. はじめに 2
2. 志津川湾の営み 3
3. ラムサール条約ってなに? 7
4. 志津川湾の藻場 11
5. 志津川湾の干潟・湿地 23
6. 志津川湾の水鳥 29
7. 志津川湾の特徴的な生きものたち .. 35
8. 湿地を活かしていくために 37



みなみさんりくちょう うみ かんきょう
南三陸町の海は、どのような環境になっているのかな？

このハンドブックをみながら、みんなの故郷の海『志津川湾』に
ついてまな
ついで学んでみよう。



1. はじめに

みなみさんりくちょう うみ た よう し ぜんかんきょう ひろ ああ い
南三陸町の海には多様な自然環境が広がり、多くの生きものたち
く ふくざつ い く かいがん ちい い
が暮らしています。複雑に入り組んだリアス海岸には、小さな入り
え つら いそ ひ が た い はくく たいへいよう
江がいくつも連なり、磯や干潟が生きものを育てています。太平洋
ちやくせつめん がいよう えいきよう つよ う かいがん み いっぽう ふか わん
に直接面し、外洋の影響を強く受ける海岸が見られる一方、深い湾
あく あだ かんきょう ひろ
の奥は穏やかな環境が広がります。

うた つ し づ が わ と くら ふく みなみさんりくちょう うみぜんたい し づ
ここでは、歌津、志津川、戸倉を含む南三陸町の水全体を「志津
がわわん よ み あも い わん あこな
川湾」と呼び、そこで見られる主な生きものたちや、湾で行われて
ぎょぎょう よう す しょうかい
いる漁業の様子を紹介します。

し づ が わ わん せ かい て き き ち ょ う かんきょう り ゆ う
志津川湾が世界的に貴重な環境である理由を、みんなでいっしょ
さ が
に探してみましよう。



し づ が わ わん ない つばきしま
志津川湾内の椿島

2. 志津川湾の営み

○南三陸町の昔の漁業と海辺の様子

南三陸町では昔から漁業が盛んでした。志津川湾のタコは「西の明石、東の志津川」といわれるほど味が良



いことが知られていま いしやり いしやりでタコを釣るす。「いしやり」と呼ばれる、平らな石に、先っぽに針がついた竹をひもで結んだ道具を船から垂らしてとる方法や、昭和初期からは「タコツボ」と呼ばれる壺を海に沈めてとる方法などがありました。



ウニ漁（戸倉）

ウニやアワビは、船から箱メガネをのぞきながら「ウニカギ」や「アワビカギ」と呼ばれる先の曲がった道具を長い竿の先に付けてとります。

明治時代に入るとノリ養殖を皮切りに、養殖漁業が始まりました。それまでは海が荒れると漁を行うことができず安定した収入が期待できませんでしたが、養殖が定着することにより人々の生活は安定しました。現在でも、志津川湾にはさまざまな養殖施設が並び、特徴的な風景を作り出しています。

し づ かわん げん
志津川湾では現
ざい ようしよく あこな
在、ノリ養殖は行
われていません
が、し づ かわん
志津川湾のノ
り しゅるい ああ
リは種類が多く、
あじ よ
味が良かったそう
です。



ノリス



ノリ干し場

まつばら しょうわ ねん
(松原・昭和30年ごろ)

ようしよく
養殖されたノリは、「ノリス」の上に置いた木枠に入れて形を整え、
ノリ干し場で干していました。



フカメ干し

とぐら ながしず
(戸倉・長清水)

つづ はじ ようしよく しょうわ
続いて始まったフカメ養殖 (昭和
30年代) は、フカメの種苗のつい
ねんだい しゅびよう
だ縄を海に浮かべて成長させ、生や
なわ うみ う せいちょう なま
加工したものを出荷しました。
かこう しゅつか

うみ ひとびと めぐ
海は人々に恵みをもたらすこともありましたが、ああ さいがい
大きな災害をも
たらすこともたびたびありました。みなみさんりくちょう ねん めいじ
南三陸町では1896年の明治
さんりくじしん ねん じしん じしん つかみ ああ
三陸地震や1960年のチリ地震など、地震にともなう津波が多く
あよ ああ ひがい のこ
押し寄せ、大きな被害を残しています。しかしそのたびにみなみさんりくちょう
ひとびと うみ あ うみ い れきし
の人々は海と向き合い、海とともに生きてきた歴史があります。

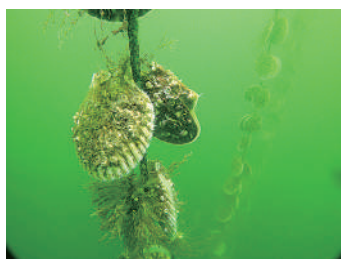
○志津川湾の漁業

漁業は南三陸町の重要な産業です。志津川湾ではいろいろな漁業が営まれています。特に、三方を陸に囲まれた穏やかな環境を活かした養殖業が盛んに行われています。



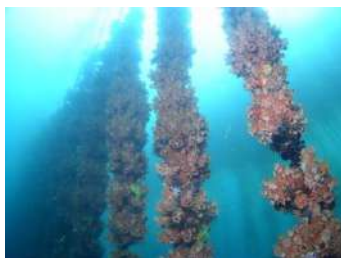
カキ養殖

マガキの養殖は志津川湾での主要な養殖業の一つです。大きな黒い浮きの下にはたくさんのカキがロープでつり下げられています。カキは海中の植物プランクトンなどをろ過して食べ成長します。2017年、戸倉地区のカキ養殖は、環境に配慮した養殖水産物のエコラベル(ASC認証)を取得しました。



ホタテ養殖

生後1年ほどのホタテの殻の耳の部分にテグスを通してホタテを海中につるして行われます。その後1-2年で出荷するサイズに成長します。



ホヤ養殖

マボヤが付着したロープを海中につるして行われます。3年目から4年目の夏に水揚げされ出荷されます。5-8月が旬です。



ワカメ養殖

水温が下がる11月頃に幼いワカメを
ロープにはさみ込み、そのロープを水面
近くに沈めて養殖します。2-5月に収穫
します。



ギンザケ養殖

淡水で飼育した稚魚を秋に海に浮かべ
た生け簀に入れ、エサを与えて育てます。
ギンザケは成長が速く、春から夏には水
揚げされます。志津川湾はギンザケ養殖
発祥の地です。



タコかご漁業

かごの中にサンマなどのエサを入れて
海底に沈め、タコを誘い込みます。
2017年秋は、記録的なマダコの豊漁と
なりました。



定置網漁業

沖の海底に大きな網を設置して、その
中に魚を誘い込みます。魚がたまった網
を船で上げてまとめて水揚げします。
サケやブリ、イワシなど様々な魚をとる
ことができます。

3. ラムサール条約ってなに？

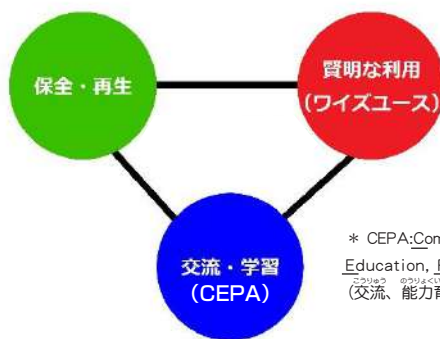
ラムサール条約の正式な名前は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」です。私たちの暮らしを豊かにする湿地を守るために決められた、世界でも有名な条約です。



ラムサール条約のロゴ

「湿地」とは、川や池や田んぼ、海岸や干潟など、海辺をふくむ身近な水辺のことを指します。

ラムサール条約は、「保全・再生」と「賢明な利用（ウィズユース）」を目的とし、そのための「交流・学習（CEPA*）」を進めることを大切にしています。



* CEPA: Communication, Capacity building, Education, Participation and Awareness (交流、能力育成、教育、参加、普及啓発)

① 「保全・再生」

私たちの暮らしを支える重要な湿地の生態系を守る。

② 「賢明な利用（ウィズユース）」

湿地の生態系を保ちながらその恵みを末長く、賢く使う。

③ 「交流・学習（CEPA）」

湿地での交流・学習を通して湿地の大切さを広く伝える。

○ラムサール条約湿地「志津川湾」

2018年10月18日、歌津・志津川・戸倉の海域を含む
南三陸町の海「志津川湾」がラムサール条約湿地に登録されました。
そして、その5日後の10月23日には、アラブ首長国連邦の都市
「ドバイ」で行われたラムサール条約締約国会議にて、認定証が
授与されました。



ラムサール条約湿地登録認定証



志津川湾

ラムサール条約登録湿地
Ramsar Site Shizugawa-wan

ラムサール条約湿地
「志津川湾」のロゴマーク



○日本のラムサール条約湿地

現在、日本にはラムサール条約に登録された湿地が52ヶ所あります。宮城県には志津川湾のほか、伊豆沼・内沼、化女沼、無栗沼・周辺水田、水田、化女沼が登録されています。



日本のラムサール条約湿地

コラム：ラムサール条約湿地の登録基準ってなに？

ラムサール条約湿地に登録されるには、以下の9つの国際的な登録基準のどれかに当てはまる必要があります。

☑基準1：特定の生物地理区内で、代表的、希少または固有の湿地タイプを含む湿地。

☑基準2：絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地。

☑基準3：特定の生物地理区内における生物多様性の維持に重要な動植物を支えている湿地。

☑基準4：動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている湿地または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地。

☐基準5：定期的に2万羽以上の水鳥を支えている湿地。

☑基準6：水鳥の1種または1亜種の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地。

☐基準7：固有な魚介類（魚、エビ、カニ、貝類）の亜種、種、科、魚介類の生活史の諸段階、種間相互作用、湿地の価値を代表するような個体群の相当な割合を支えており、それによって世界の生物多様性に貢献している湿地。

☐基準8：魚介類の食物源、産卵場、稚魚の生育場として重要な湿地あるいは湿地以外の漁業資源の重要な回遊経路となっている湿地。

☐基準9：鳥類以外の湿地に依存する動物の種または亜種の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地。

志津川湾はこの中のうち、チェックのついた5つの基準を満たしています。これは滋賀県の琵琶湖などと並んで日本で最も多い数です。

4. 志津川湾の藻場

海藻の森や海草の草原のことを「藻場」といいます。藻場をつくる海藻は、ウニやアワビなど、様々な生きものの大切なエサになります。また、普段は沖にいても、子どもの頃を藻場に守られて過ごす魚や、藻場で卵を産む魚もいます。このように、藻場は多くの生きものの隠れ家やゆりかごとなります。さらに、葉の上に住む小さな生きものたちと一緒に、海の水をきれいにします。

藻場は生態系の中で大切な役割を果たすとともに、私たち人間にとっても豊かな恵みを与えてくれる重要な存在なのです。これまでの調査から、志津川湾では200種以上の海藻と5種の海草が確認されています。



し づ がわん さ ま ざ ま も ば
志津川湾には様々なタイプの藻場があります。



コンブ場

マコンブは、砂まじりの浅い海底で大きな森をつくる海藻です。このような藻場をコンブ場といいます。ウニやアワビの重要なエサにもなります。



アラメ場

波当たりの強い浅い岩場に生えるアラメがつくる藻場です。アラメの体は茎と葉からなり、茎は二叉に枝分かれます。切れ落ちた葉はウニやアワビの重要なエサになります。



ガラモ場

アカモクなど、体に浮袋を持つ海藻の仲間が作る藻場です。浮袋の浮力で海底から立ち上がり、背の高い藻場を作ります。



アマモ場

アマモなどの海草の草原です。海草は陸上の種子植物と同じ仲間です。志津川湾では5種類のアマモ類が確認されています。

しづがわん 志津川湾は『マコンブ』と『アラメ』が共存する貴重な海

マコンブは北海道で有名なように、冷たい海を代表するコンブの仲間です。一方アラメは、暖かい海を代表するコンブの仲間です。志津川湾は、その両方が見られる大変貴重な海なのです。



マコンブ

北海道から茨城県まで分布します。まとまった藻場がある海域としては志津川湾が南限に近いと言われています。寿命：1－2年。

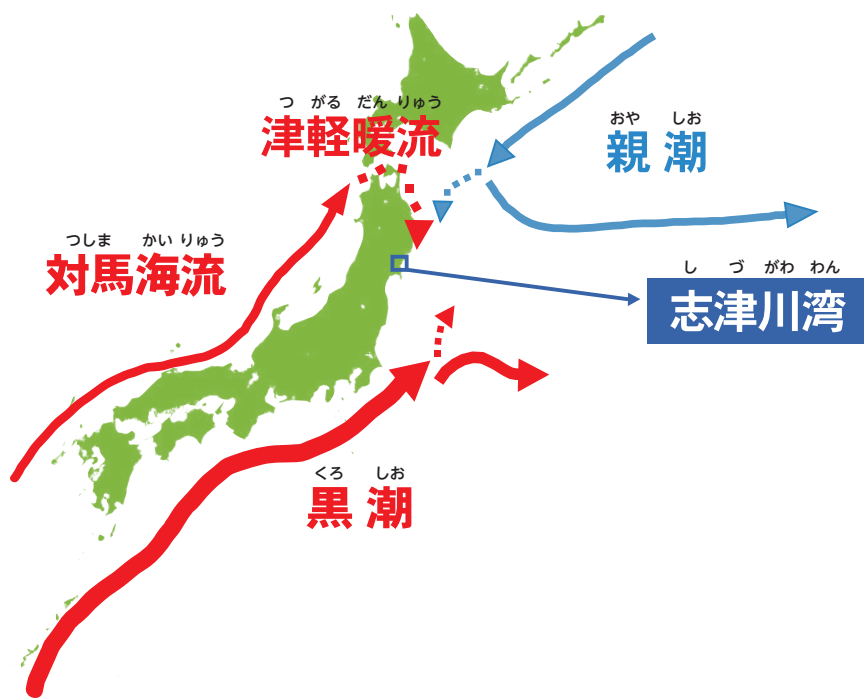


アラメ

九州から岩手県まで分布します。まとまった藻場がある海域としては、志津川湾が北限に近いと言われています。三陸では「カジメ」と呼ばれます。

コラム：志津川湾と海流

志津川湾は、冷たい海流（寒流）と暖かい海流（暖流）の影響をバランス良く受けています。北からやってくる冷たい親潮は、北海道の沖を通過して三陸の沖で東に向きを変えますが、その支流が三陸沿岸へ到達します。一方、南からやってくる黒潮は房総半島沖で蛇行しながら太平洋の東へ流れを変え、その支流が三陸沿岸へ到達します。さらに、日本海から津軽海峡を抜けて南下する津軽暖流も三陸沿岸にやってきます。志津川湾は、これら三つの海流が混ざり合う多様性豊かな貴重な海なのです。



コラム：モニタリングサイト1000調査

毎年6月、志津川湾の樫島付近で海藻類の生育状況を記録する調査を行っています。多様な生態系を守る取組みの一つとして、環境省は国内の重要な自然環境を1000ヶ所程選んで調査をしています（モニタリングサイト1000）。志津川湾は、全国で6ヶ所しかない藻場サイトのひとつに選ばれているのです。

南三陸ネイチャーセンター（南三陸町自然環境活用センター）では、2008年からこの調査に関わり、藻場の変化を記録してきました。震災後、地盤沈下の影響で藻場が岸寄りにシフトしたことがわかりました。これは震災前のデータがあったからこそ明らかになったことです。藻場は、さまざまな海の生きものたちを育む大切な存在です。その様子をこれからもしっかりと見守っていく必要があります。

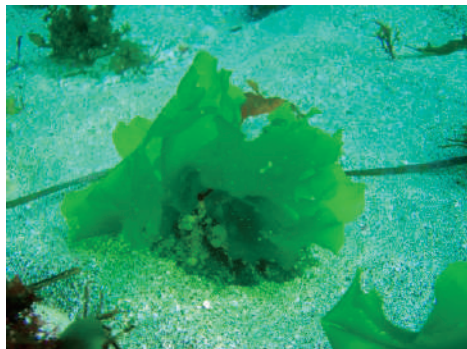


藻場調査の様子

○志津川湾の海藻たち

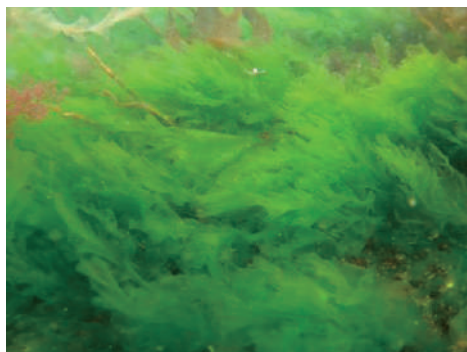
(海藻は緑色、茶色、赤色の3グループに分けることができます)

【緑藻類 (りょくそうるい)】



アナアオサ

とても鮮やかな緑色の海藻です。
その名のとおり葉には小さな穴がたくさんあいています。コクガンなど植物を好む海鳥の重要なエサになります。



ウスバアオノリ

体は薄く、幅が広くて長い葉のうな形です。長さは10-30cmほどにもなります。お好み焼きやたこ焼きにかける青のりの原料になります。



オオハネモ

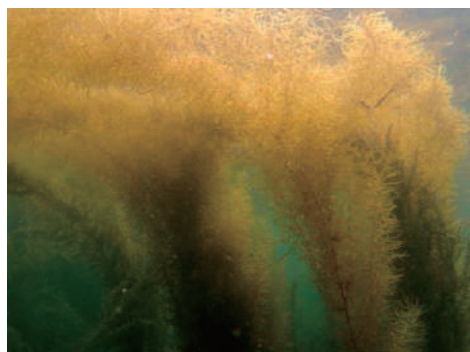
やわらかい手触りで、鳥の羽根のような形をした美しい海藻です。高さが20-30cmの大型になることから、この名前がつけられました。

【褐藻類（かっそうるい）】



ワカメ

志津川湾のメジャーな海産物のひとつ。メカブはワカメの根元部分のことです。生ワカメは茶色ですが、熱湯に入れると鮮やかな緑色になります。



アカモク

体にたくさんの浮袋を持ち、海底からまっすぐ水面へ伸びていきます。時には長さが5mを超えることもあります。「ギバサ」と呼ばれ食用にもされます。



ヒジキ

ヒジキは茶色い海藻の仲間です。浅い岩肌を覆うように群生します。食卓に上るヒジキが黒いのは、茹でたり干したりする加工を繰り返したためです。

【褐藻類（かつそうるい）】



マツモ

さんりく ほこ こうきゅうしよくざい

三陸が誇る高級食材のひとつです。

しるもの い みどりいろ

汁物に入ると緑色になり、香ばし

い磯の香りが漂います。生や干した

ものをあぶって「焼きマツモ」とし

ても利用されます。



イシモズク

し づ がわん すうしゅるい

志津川湾には数種類のモズクの

仲間が生育しています。写真の海藻

は、岩につくことの多いイシモズク

と思われます。「岩もずく」とも呼ば

れています。



ウルシグサ

とり はねじょう うつく かいそう し

鳥の羽状の美しい海藻ですが、死

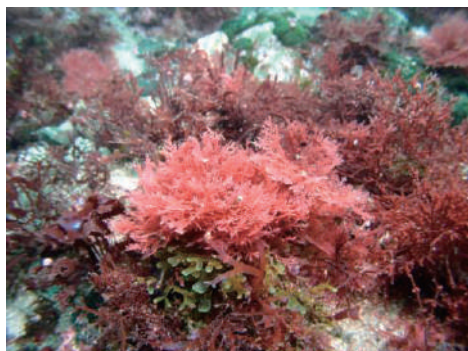
ぬと体から硫酸を出してポロポロに

なります。他の海藻まで痛めてしま

うため、コンブ漁師からは嫌われて

います。

【紅藻類（こうそうるい）】



ユカリ

あざ あかい む かいそう こま
鮮やかな赤色の海藻です。細かく
えだ わ は こう ご なら うつく
枝分かれした葉が交互に並んだ美
かたち かいそう
い形をしています。海藻おしぼには
か ざいりょう
欠かせない材料です。「ゆかり」とは、
むらさきいろ い み ことば
紫色を意味する言葉でもあります。



フクロフノリ

み そ し る ぐ さ し み
味噌汁の具や刺身のツマとしてよ
く食べられる海藻です。体は袋状の
な かいそう からだ ふくらじょう
空洞で、潮が引いたあとの岩肌では、
くうどう しあ ひ いわはだ
中の空気が膨らんでいることがあります。
なカ くう き ふく
ます。



マクサ

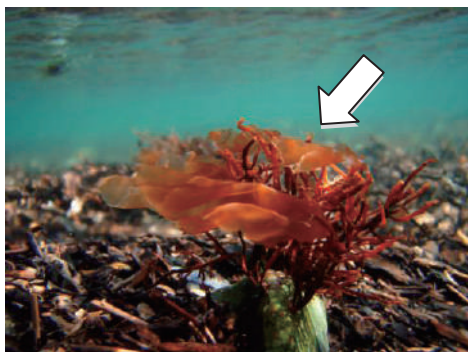
よ かんてん ざいりょう
テングサとも呼ばれ、寒天の材料
いちばんりょうしつ こうきゅうかいそう
として一番良質とされる高級海藻の
ひと し づ がわわん いぜん
一つです。志津川湾でも以前はマク
りょう さいきん あこな
サの漁がありましたが、最近では行わ
れていないようです。

【紅藻類（こうそうるい）】



ヘイゴコロ

ずいじゅう 水中であライトを当てるとけいこうしよく蛍光色に
ひか光る美しいかいそう海藻です。おしばにしま
 も、ハート型の葉先ががた桃色はがかっ
 たあかいろ赤色になりとてもきれいです。
 2010年にこの名前がつけられま
 した。



ソメツケアマノリ

みず 水の流れにながたなびいているのがソ
 メツケアマノリです（矢印）。河か口
ふ付近のきん干潟にひ生育するせいいくノリの仲間
 で、写真ではオゴノリのしゃしん棒状の葉に
 くっついていぼうじょうます。水戸は辺川の河み口
さつえいで撮影されました。



エゾシコロ

せっかいしつ 石灰質の固かたい体を作るサからだングモの
 仲間です。体には、たふしくさんの節が
 あり、枝はえだ羽根状には枝分えだわかれます。
なみ波あ当たりの強い磯つよにいそ生育せいいくします。

【海草類（うみくさるい）】



アマモ

ないわん しず すな ち せいいく うみくさ
内湾の静かな砂地に生育する海草の
なか ま かいちゅう おお そうばん
仲間です。海中に大きな草原をつくり、
さまざま い す
様々な生きもののすみかとなります。
じゅうよう
コクガンの重要なエサのひとつです。



スガモ

みやぎ けん ※
(DD: 宮城県)

こと なみ あ つよ あさ
アマモと異なり、波当たりの強い浅い
いわ ば せいいく うみくさ なが ま ぼそなが
岩場に生育する海草の仲間です。細長く
かた は とくちょう けんない さんりくかいがん
固い葉が特徴です。県内では三陸海岸
なん ぶ まつしま ぶん ぶ せいいく ち
南部から松島にかけて分布し、生育地は
かぎ
限られています。



スゲアマモ

すな さ でい かいてい せいいく うみくさ
砂から砂泥の海底に生育する海草の
なか ま ち か けい ほか うみくさるい
仲間です。地下茎が他の海草類のよう
よこ ひろ び ず いっ か しょ かぶ
に横に広がらず、一ヶ所で株のように
たば せいいく とくちょう
束になって生育する特徴があります。



タチアマモ

(DD: 宮城県, VU: 環境省)※

草丈が7 mにもなる世界最長の海
草類です。他のアマモ類よりも深い
水深に生育します。東日本大震災に
よる津波で生育域が減少しましたが、
徐々に回復していることが確認され
ています。環境省のレッドリストで
は絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

“海草の花”

海藻は花を咲かせることはありませんが、海草は海中で花を咲かせ実を
つけます。下の写真は、スゲアマモの花です。春になると茎を伸ばし、そ
の先に小さな白い花をつけます。



(※: P24 参照)

5. 志津川湾の干潟・湿地

干潟は、多くの生きものたちの重要なすみかです。一生干潟で生活するものや、幼生の時など一生のごく一部の時期を過ごすものなど、湾内の多くの生きものを育む大切な存在です。また、干潟の泥の中に住む動物や微生物のはたらきによって水をきれいにする大切な機能を担っています。志津川湾の海岸には、複雑に入り組んだ入り江がいくつも連なり、たくさんの干潟が見られます。



「日本の重要湿地500」に選定

志津川湾は、環境省が選定する「日本の重要湿地500」に選定されています。

選定理由：アマモ類4種（アマモ、スガモ、スゲアマモ、タチアマモ）が生育し、アマモ場、コンブ場、アラメ場およびガラモ場の4タイプの藻場が分布する（p. 6－7, 15－16 参照）。底生動物の種多様性が高く、これらの生息地として相当な規模を有する。

「宮城県の重要な干潟」に選定

細浦と折立海岸の干潟は、まとまった干潟があることや底生動物の多様性から「宮城県の重要な干潟」に選定されています。

また、湾内の干潟からは数多くの希少動物が確認されています。



細浦での調査風景



折立海岸

絶滅危険度からの評価の区分と内容

区分	内容
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅の危機が増大している種
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危険度は小さいが、存在の基盤が危うい種
情報不足 (DD)	希少であるが、情報が不足している種

「宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物（2016）」より

しづがわん ひがた きしょう い
【志津川湾の干潟で見られる希少な生きものたち】



シロウオ (VU) 上:オス 下:メス



アカイソガニ (DD)



バルスアナジャコ (DD)



サンリクドロソコエビ (DD)



サクラガイ (NT)



マテガイ (NT)

しづがわん ひがた きしょう い
【志津川湾の干潟で見られる希少な生きものたち】



イボキサゴ (NT)



クビキレガイモドキ (VU)



ナギサノシタタリ (VU)



ヤマトクビキレガイ (NT)



ネムグリガイ (DD)



ホウザワイソギンチャク (NT)

○八幡川河口干潟の生きものの調査

今から50年ほど前、八幡川河口の松原海岸は潮干狩りなどが楽しめる身近な場所でした。1960年のチリ地震津波の後に防潮堤が作られ、松原海岸は「松原公園」となりました。しかし、2011年の東日本大震災による津波で防潮堤が壊され、再び干潟や磯を含む海岸に戻りました。

志津川高校自然科学部の部員たちは、この海岸にできた干潟を松原干潟と呼び、どのような生きものが暮らしているのか調査を始めました。これまでの調査の結果、100種以上の生きものが干潟で見つかりました。ここでは、実際の調査方法と干潟で見つかった貴重な生きものたちを紹介します。



現在の八幡川河口干潟の様子

ちょうさ ほうほう 調査の方法



- ①地表にいる生きものを探す
生きものは岩の隙間や石の裏にいることが多い



- ②泥や砂の中にいる生きものを探す
スコップで土を掘り返したあと、ふるいにかけて生きものを探す



- ③見つけた生きものを袋に入れる
持ち帰ったあと、どんな生きものがいたか、図鑑を使って名前を調べる

はちまんがわ か こう ひ がた き ちょう い 八幡川河口干潟の貴重な生きもの

この干潟は志津川を中心街近くにありますが、絶滅のおそれがある貴重な生きものが多く見つかっています。



トリウミアカイソモドキ

VU (宮城県)

かんきょうしょう にほん がっかい
NT (環境省、日本ベントス学会)



ヨモギホンヤドカリ

かんきょうしょう
NT (環境省)

にほん がっかい
NT (日本ベントス学会)



スジホシムシモドキ

かんきょうしょう みやぎけん
NT (環境省、宮城県)

にほん がっかい
日本ベントス学会)



カネコボシガニ

かんきょうしょう
DD (環境省)

地元の高校生たちの手によって、八幡川河口干潟が志津川湾にとっても重要であることが分かってきました。今後も調査を続けていけば、さらにたくさんの生きものが見つかるかもしれません。

6. 志津川湾の水鳥

志津川湾はコクガンの重要な越冬地



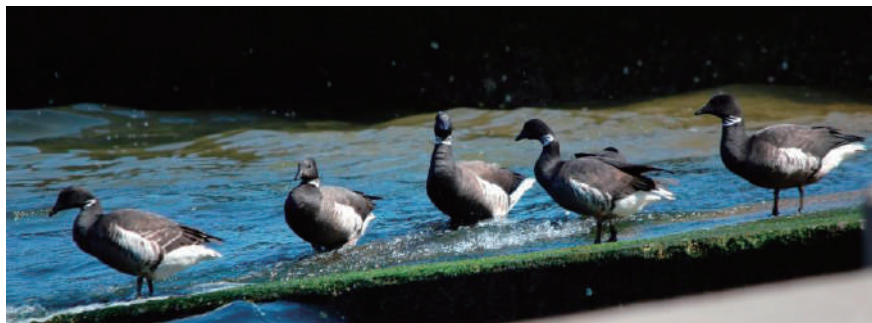
毎年冬になると、遥か北方から南へ渡ってくる鳥たちがいます。志津川湾にも沢山の種類の水鳥が集まり冬を越します。コクガンもその一つで、近年では毎年300 - 400羽ほどが志津川湾へやって来ます。



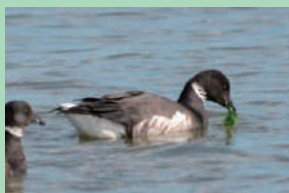
コクガン



- ・ ガンの仲間では唯一海に暮らす種類
- ・ 国の天然記念物
- ・ 絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅱ類：環境省・宮城県）



コクガンは北極圏のツンドラで繁殖した後、冬鳥として北日本沿岸に
 やってきます。個体数が少なく、越冬地も限られています。静かな内湾で
 あることや、エサとなる海藻や海藻の安定した藻場があることと、休憩
 場所となる岩礁帯などの存在が必要です。志津川湾には、コクガンが冬を
 越すのに適した環境がそろっています。



アオサをついばむコクガン



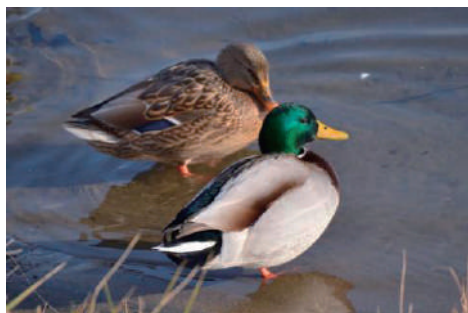
アナアオサ



アマモ



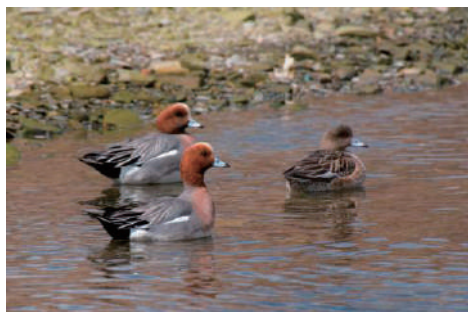
しづがわのうみどり ふゆ くわたりどり
【志津川湾の海鳥】 冬にやって来る渡り鳥



うえ しした
 上:メス 下:オス

マガモ

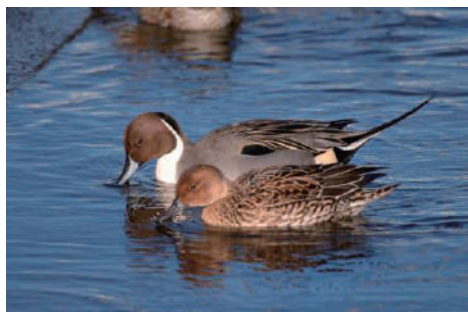
別名「^{べつめい}あおくび」と呼ばれる通り、
 オスの^{みどり}緑の頭と^{あたま}バナナ色の^{いろ}くちばし
 はよく^{めだ}目立ちます。一方メスの^{いっぽう}くちばし
 は^{いろ}オレンジ色です。^{りく}陸ガモの^{いっしゅ}一種
 ですが、^{かいがん}海岸でも多く^{おお}見られます。



ひだり みぎ
 左:オス 右:メス

ヒドリガモ

^{ふなつ}船着き場の^ばスロープに^あ上がって^む群
 れで^{かいそう}海藻をついばんでいる^{すがた}姿をよく
^み見かけます。オスは^{くちふえ}口笛のような
^{ひび}響く^{おお}大きな^{こえ}声で^な鳴きます。

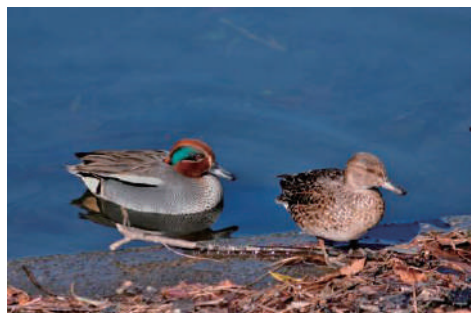


うえ しした
 上:オス 下:メス

オナガガモ

^のピンと伸びたオスの^{お ばね}尾羽が^{なまえ}名前の
^{ゆらい}由来です。^{うみ}海沿いでは^{おお}大きな^む群れに
 はならず、^{おきあい}沖合に^{たんどく}単独か^{ペア}ペアでいる
 ことがあります。

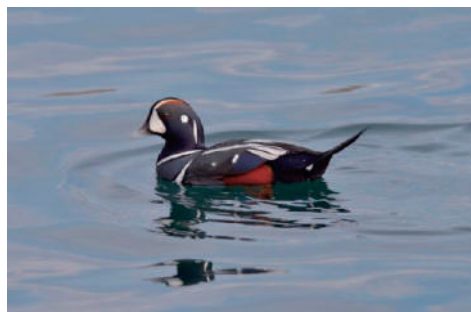
しづがわのうみどり ふうめい くわたりどり
【志津川湾の海鳥】 冬にやって来る渡り鳥



ひだり みどり
 左:オス 右:メス

コガモ

名前なまえの通り小柄こがらなカモです。オスの「ピリィ、ピリィ」という鳴き声なごえはよく通とおります。お尻しりの黄色きいろい三角さんかく模様もようもよく目立めだちます。

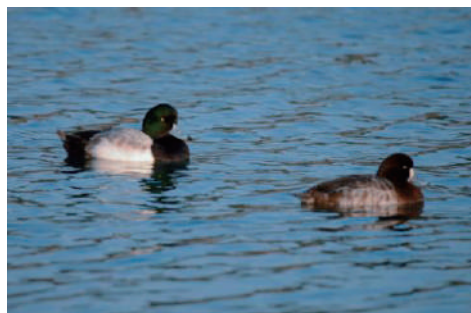


オス

シノリガモ

湾わんの外そとを好むこのカモで、湾わんの奥おくではあまり見みられません。歌津泊浜うたつとまりはましゅうへん周辺や椿島つばきしまより東ひがしの海域かいきなどで見みられることがあります。オスの独特どくとくの模様もようはまるでピエロピエロのようです。

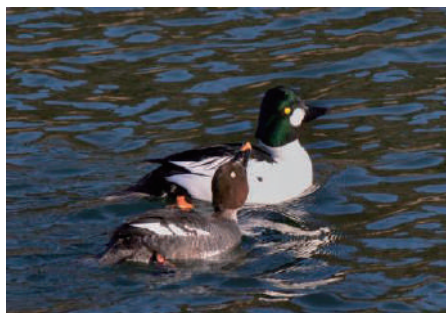
スズガモ



ひだり みどり
 左:オス 右:メス

オスは黒い頭くろあたまで緑みどりの光沢こうたくがあります。以前いぜんは湾わんの奥おくの開けた水面ひらすいめんに数百羽すうひゃくわたん単位いむで群むれている様子ようすが見みられましたが、最近さいきんはそれほど大きな群むれは見みられていないようです。

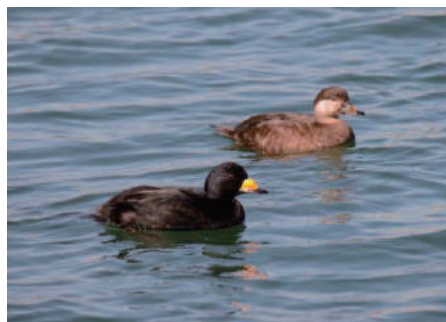
【志津川湾の海鳥】 冬にやって来る渡り鳥



上:オス 下:メス

ホオジロガモ

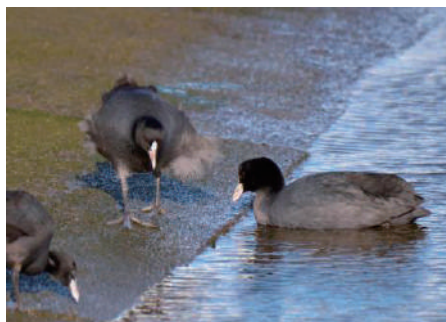
名前のとおり、オスの頬にはよく目立つ大きな白い模様があります。おむすび型の頭も特徴的です。河口域から外海まで広く見られますが、大きな群れになることはありません。



左:オス 右:メス

クロガモ

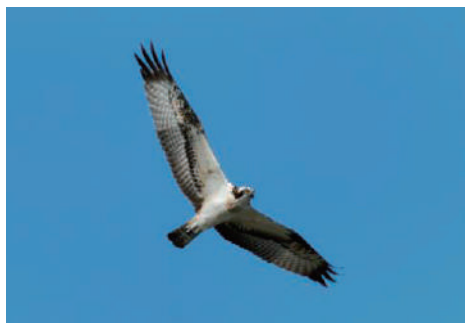
オスは体が真っ黒で、黄色い鼻先がよく目立ちます。湾の外に多いカモですが、震災後は湾の奥まで群れで入ってくるようになりました。「フィー、フィー」と涼しげな声で鳴きます。



オオバン

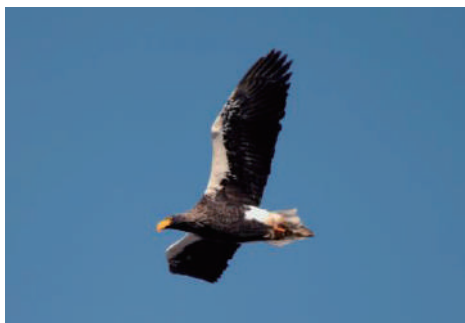
黒い体に白い鼻先が目印です。コクガンやヒドリガモなどに交じって見られることが多く、水に潜ってエサを採るので、潜れない他の鳥たちにエサを横取りされることがあります。

しづがわわん ちゅうきんあい
【志津川湾の猛禽類】



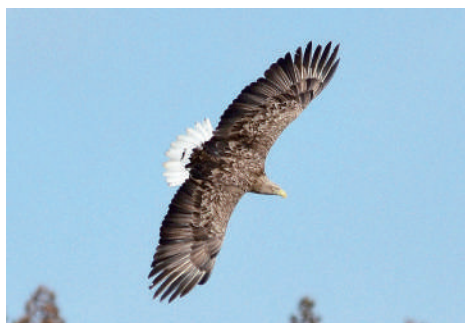
ミサゴ

空中でホバリングした後、海面に飛び込んで狙った魚を捕えます。飛行機の「オスプレイ」は、ミサゴの英語名が由来です。一年を通して観察でき、志津川湾を取り囲む山々で数ペアが繁殖しています。



オオワシ

黄色いくちばしとくさび形の白い尾、翼前方の白い縁取りが特徴です。国指定天然記念物で、絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅱ類：環境省）の希少種です。毎年数羽が志津川湾で越冬します。



オジロワシ

その名のとおり尾の先が白いの
が特徴です。国指定天然記念物で、絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅱ類：環境省）の希少種です。志津川湾には冬鳥として数羽が飛来します。

7. 志津川湾の特徴的な生きものたち

これまで行われてきた調査から、志津川湾ではユニークで可愛らしい生きものたちが多く確認されています。



クチバシカジカ

おちょぼ口で海底をチョコチョコと歩く体長7cmほどのカジカの仲間です。南三陸町のキャラクター「クチ坊」として親しまれています。



ダンゴウオ

まん丸の体がお団子のような可愛らしい魚です。体長は2cmほど。体色は赤やピンク、緑などカラフルになります。普段はお腹の吸盤で海藻や岩にくっついてしています。



ソメフケウミクワガタ

オスの成体（写真右上）はクワガタムシそっくりの大きなアゴがあります。実はエビやカニの仲間で、幼生（写真オス以外）は魚の寄生虫として生活しています。体長は5mmほど。



タシンスナクモヒトデ

1878年に東京湾で見つかった以来、100年以上の間見つかったことのない幻のクモヒトデの仲間が志津川湾で見つかりました。



マダコ

志津川湾が名産の美味しい海産物です。
貝やカニが大好き。暖かい海を代表する
タコの仲間です。南三陸町ではキャラクター
「オクトパス君」として親しまれています。



ミズダコ

冷たい海を代表するタコの仲間です。
大型のタコで、体長が3mを超えることも
あると言われます。



クロタマキビ

波が当たる岩場に見られる巻貝です。
冷たい海に住み、志津川湾が分布の南限と
されています。



オオウスイロヘソカドガイ

波しぶきがわずかに当たる程度の岩場
で見られる小さな巻貝です。暖かな海に住
み、志津川湾が分布の北限とされています。

8. 湿地を活かしていくために

透き通った海の上に浮かぶ磯舟。その影が白い海底に映っています。まるで沖縄の砂浜のようですが、海底が白いのは砂浜ではなく石灰藻と呼ばれるピンク色の藻類が岩肌を覆っているからです。今、志津川湾では、マコンブやアラメなど大型の海藻類が姿を消し、この石灰藻が海底を覆う「磯焼け」と呼ばれる現象が見られるようになりました。その原因には様々な理由が考えられますが、そうした場所では海藻を食べるウニの数が多く、新たに芽生える海藻も食べてしまうのでなかなか元の海藻の森には戻りません。また、磯焼けが見られる海のウニは、身入りが悪く、商品として売れなくなります。



2015年12月2日 野島周辺



いそや かいてい
磯焼けした海底とウニ



まび さぎょう
ウニの間引き作業



まび ご そだ こ
ウニ間引き後に育ったアラメの子



せいちょう わか
成長した若いアラメ

げんざい かいそう もり ふっかつ み い と
現在、海藻の森が復活し、実入りのよいウニやアワビが取れるバ
ランスのとれた海づくりを目指した取り組みが行われています。漁協
だいごく やくば きょうどう うみ もく かいそう た みつど
と大学、役場が共同で海に潜って海藻や海藻を食べるウニの密度を
しらべたり、まび さぎょう ていきてき おこな じょうくう
調べたり、ウニの間引き作業を定期的に行っています。また、上空
さつえい がそう ひだり しゃしん かいそう りよう へん か きろく
から撮影した画像（左の写真）をもとに海藻の量やその変化を記録
しています。じみち ちょうさ ほうさく
地道な調査ですが、これからの方策をさぐるヒントが
み きたい
見つかりと期待しています。



参考図書

神谷充伸（監修）2012.「ネイチャーウォッチングガイドブック海藻」誠文堂新光社
志津川町誌編さん室（編集）1989.「生活の歓 志津川町誌 II」志津川町
志津川高校 自然科学部 2018.「松原干潟の生き物たち」NPO 法人底上げ
高野伸二 2015.「フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂新版」日本野鳥の会
田中次郎（解説）2004.「日本の海藻」平凡社
政岡伸洋・鈴木卓也・小谷竜介（監修）2008.「波伝谷の民俗」東北歴史博物館
南三陸ネイチャーセンター友の会 2016.「南三陸 海鳥ガイドブック」
宮城県 2016.「宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物」宮城県環境生活部自然保護課
横浜康継 2001.「海の森の物語」新潮選書

写真提供

青木優和（東北大学大学院農学研究科水圏植物生態学分野）
佐藤賢二（公益財団法人日本野鳥の会宮城県支部）
鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）
太齋彰浩（デザイン・パル）

ラムサール条約湿地 志津川湾

2017年 3月31日発行「南三陸の海とラムサール条約」
2019年 2月 8日改訂版
2019年10月28日改訂版 第2版
2021年 3月26日改訂版

発行／南三陸町

〒986-0725 宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田101番地
TEL：0226-46-2600（代表） FAX：0226-46-5348
URL：<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/>